

松下幸之助記念志財団 研究助成  
研究報告

(MS Word)

## 【氏名】

歌川光一

## 【所属】(助成決定時)

聖路加国際大学大学院看護学研究科・准教授

## 【研究題目】

シリアスレジャーの観点からみた日英生涯学習政策の比較研究  
—1990年代以降のアマチュア芸術文化活動に着目して—

## 【研究の目的】(400字程度)

本研究の目的は、シリアスレジャー(以下、SLと略記)の観点から日英の生涯学習政策の比較研究を行うことにある。新自由主義の時代を迎えた1990年代以降の両国における、生涯学習政策としてのアマチュア芸術文化活動の支援方法と課題を明らかにする。

SLは、カナダの余暇社会学者ロバート・ステビンスが提唱した概念であり、レジャー・スタディーズにおいて広く用いられている。好奇心や自発性に満ちたSLは、特に社会的マイノリティにとって、社会関係資本の構築や社会参画の契機として重要な意味を持っている。一方で、SLは消費的なレジャー活動として捉えられやすく、教育政策、文化政策の重要課題としての認識は未だ広がっていない。

本研究は、実態としてSLが先行しながらもその政策上の位置づけに難航している日本と、20世紀末以降にSLを含む成人のインフォーマル学習の支援を推進し始めたイギリスの生涯学習政策の比較検討から、日本におけるSLを視野に入れた新たな生涯学習システムの構築に示唆を得ようとするものである。

## 【研究の内容・方法】(800字程度)

本研究は、当初、関連施設(日本の公民館、生涯学習センター、学校、イギリスの成人教育センター、コミュニティセンター、学校)においてアマチュア芸術文化活動に励む団体や個人の活動実態を明らかにし、行政による支援という点からみた場合の成果と課題を明らかにすることを予定していた。結果としては、2020-21年度に続いたCOVID-19感染拡大の影響のため、政策文書の分析が主となった。

イギリスでは、1990年代以降、生涯学習が積極的に展開される学習社会を目指し始めた。特にブラウン労働党政権は、雇用や資格・学位の取得を目指さない「生きがい」としての成人学習の支援のあり方について協議文書を提出し、研究大学技能省(DIUS、当時)が白書『成人のための学習革命(The Learning Revolution)』が公表されるなど、SLが生涯学習政策に包摂されるという動向が見られた。「学習」をキーワードとした、成人のインフォーマル学習の充実を支援する補助金創設、オープンスペース運動の推進、民間支援、中央省庁連携によるネットワーク形成など政策が打ち出された。しかし、その後の政権交代を経て、生涯学習政策、とりわけSLに関わる政策は、教育省(DFE)、ビジネス・エネルギー・産業戦略省(BEIS)、デジタル・文化・メディア・スポーツ省(DCMS)などに分掌されている。なお、これらの前提として、「レジャー・スタディーズ」の発達から、レジャーをめぐる格差やそれをもたらす社会背景への学術的視点が確認できる。

同時期の日本のSLに関わる動向として、臨教審に基づく生涯学習政策の展開、阪神大震災を契機としたボランティア・NPOへの着目、インターネットの普及、WLBの推奨、スポーツ庁の創設、部活動の地域移行の動向などが挙げられる。その一方、臨教審以前から、self-cultivation性の高い余暇観(教養、稽古、たしなみ等)による「教育・学習/遊び・レジャー」の区別やその関連性の検討への関心の低さ、「レジャー・スタディーズ」の未発達、社会教育学とメディア学の分離等の問題が存在し、「生涯学習」の登場・浸透が、それらの問題を一層見えづらくしてきたという経緯がある。

#### 【結論・考察】（４００字程度）

SLの観点からイギリスと比較した場合、日本の生涯学習政策においても「趣味」「生きがい」「自分磨き」それ自体は推奨され、また実際の活動も盛んであるものの、それらの活動の中で生起するインフォーマル学習の価値を認め支援するという視点がやや弱い。その結果として、実践としても「学級・講座」形式が中心となり、学習の社会的価値が、活動ジャンルやカテゴリーごと、学習者の属性(年齢、性別など)ごとに見出されやすい傾向にある。

このように日本においてインフォーマル学習を政策的に位置づけづらい一因として、生涯学習政策展開下においてもなお、教育関係者を含め、「教育」「学習」と「遊び」「レジャー」、そしてその中間にあると思われる self-cultivation 性の高い概念や価値（「趣味」「教養」「稽古」）の関係をめぐる原理的な検討と実装への方途の検討が不十分であったことが挙げられる。既存の学習科学の方法論や歴史社会学研究等の知見も活かしつつ、SLの観点から教育学とレジャー・スタディーズを架橋していく作業が肝要となると考えられる。

以上